

心理テストを用いたアセスメントにおけるサイエンスとアート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 由嗣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20102

(原 著)

心理テストを用いたアセスメントにおけるサイエンスとアート

高瀬 由嗣¹

要 約

本稿は、心理テストを用いたアセスメント業務のプロセスに着目し、各段階におけるサイエンスとアートの役割を検討した。心理テストが診断的な役割を担う以上、それはサイエンスにのっとっていなければならない。しかし、単純な法則では説明できない複雑なる人間を対象に、その個性を記述したり、結果を伝達したり、あるいは援助そのものに心理テストを直接役立てようとするならば、その仕事はサイエンスだけではなし得ない。そこではアートの側面が重要度を増してくる。心理アセスメント業務のプロセスをいくつかの局面（分析、解釈、伝達、治療的な活用）に分解してみると、それぞれの局面でサイエンスとアートの比重は異なる。この視点に立ち、本稿では心理アセスメント業務を効果的に実施するために両者を統合する方法を議論した。

キーワード：心理アセスメント、サイエンス、アート

I サイエンスとアートの意味と議論の歴史

心理テストをめぐって、これまでサイエンスとアートという2つの概念がどのように捉えられ、どのように位置づけられてきたかを、まずはロールシャッハ・テストに関する文献に基づいて整理しておく。心理テストの中でも特にロールシャッハ・テストに焦点を当てるのは、このテストが単に有名であるばかりでなく、その科学性をめぐる論争の多さは数多の心理テストの中でも群を抜いているからである (Searls, 2017)。それゆえ、上の2つの概念を整理するうえで格好の材料となる。

実際に文献をひもといてみると、「サイエンス」と「アート」という言葉を直接用いて、ロールシャッハ・テストを論じた文献は意外なほど少ない。しかし、サイエンスという言葉の代わりに「法則定立的」(Te'eni, 1998; Aronow & Moreland, 1995; Acklin, 1995)、「経験的」(Exner, 1991)、「量的」・「計量心理学的」(Exner, 1991; Moreland et al., 1995)などの言葉でその科学的側面を強調した文献、他方、アートの側面を「個性記述的」(Kramer, 1991a; 1991b)、「質的」(Ritzler, 1995)、「現象学的」(Te'eni, 1998)、「個人的」(Peebles-Kleiger, 2002)といった文脈の中

1 明治大学文学部心理社会学科 専任教授

で論じた文献は数多く見受けられる。

まずは、サイエンスの面を整理する。中村(1992)は、サイエンスの特性として(1) 普遍主義、(2) 論理主義、(3) 客観主義の三点を指摘する。(1) 普遍主義とは、「事物や自然はすべて量的なものに還元される」という立場である。これを心理テストに当てはめるならば、「量的 (quantitative)」あるいは「計量心理学的 (psychometrical)」といったアプローチに代表される。次に、(2) 論理主義とは、事物や自然のうちに生ずる出来事は「すべて論理的な一義的因果関係によって成り立っている」とする立場であり、これは「法則定立的 (nomothetic)」という言葉に代表される。さらに、(3) 客観主義とは、「扱う者の主観をまったく排除して、それらを対象化して捉える」立場であり、これには「経験的・実証的 (empirical)」という言葉が該当する。

次に、アートの面に注目する。長年、臨床医として勤務した富永(2009)は、日本語で「技術」や「技芸」などと表現されるアートを Narrative-Based-Medicine (NBM) に対応するものであるとしたうえで、唯一無二のクライアントを全人的に理解し、その人にとってより良い治療方法を選択することであると述べる。この説明に従えば、ロールシャッハ・テストにおけるアートは「個性記述的 (idiographic)」という概念と近い関係にあるといえる。「個人的 (personal)」もその同列に位置すると見なして良い。また、個性性を尊重するという意味では、量的な比較を度外視した「質的 (qualitative)」という言葉に代表されるであろう。さらに、物語としての全人的理解という面に着目すれば、それは、「現象学的 (phenomenological)」という言葉に置き換えることもできる。

さて、ロールシャッハ・テストにおけるサイエンスとアートの側面を上のような言葉で表現してきた従来の研究は、この2つをどのように位置づけてきたのか。結論を言えば、一致した見解は得られていない。そこには、サイエンスの圧倒的な優位性、すなわち量的、法則定立的な側面をことさら強調した立場 (Ritzler, 1995; Acklin, 1995) もあれば、事例性や個性性を認めながらも、その量的側面をより重視すべきとした立場 (Exner, 1991) もある。一方、アートの優位性を強調した議論としては、内容分析に基づいた個性記述的アプローチを重視する立場 (Moreland et al., 1995; Kramer, 1991a; 1991b) から、ロールシャッハ・テストはサイエンスの基盤が脆弱なので、個性記述的アプローチにこそこの方法の存在意義があるとする極端な主張 (Aronow & Moreland, 1995) ままで含まれる。

ここで取り上げたのは、ロールシャッハ・テスト関連の文献に限定されてはいる。しかし、大半の心理テストでは、量的に扱うことの難しい質的データを扱う機会も多い (例えば、テストに臨む際の対象者の言動、テスト反応間・指標間の関係性の中から導き出されるある種の法則性への着目等がこれに該当する)。これら質的なデータの分析・解釈の客観性を担保するためにデータの定量化に向けての努力がなされているのも事実である。それを思えば、ここに示した議論は、決してロールシャッハ・テストに限られた特殊な事情ではなく、あらゆる心理テストの現状を多かれ少なかれ反映していると言ってよからう。

ところで、これらの議論の中で異彩を放つのが、Te'eni (1998) の示した見解である。彼は、法則定立的アプローチと個性記述的アプローチ (換言すれば、サイエンスとアート) のどちらが

優れているか、という論争そのものに疑問を投げかける。そのように両者を相互排他的に捉えるのではなく、むしろ、テストの使用用途に応じて、両者を明確に区別すべきであると主張するのである。例えば、病態水準や法的な責任能力を問うような、言わば対象を「外側」から捉える場合は法則定立的なアプローチに従い、心理療法に活かすために本法を用いる場合、つまり対象を「内側」から理解しようとする場合は、個性記述的なアプローチを取り入れるべきであるという。つまり、Te'eni は、双方のアプローチをいずれも必要不可欠なものとし、双方の性質を押さえたうえで有効な使い分けを提唱しているのである。このような形でのサイエンスとアートの位置づけは、従来の議論とは明らかに一線を画している。その柔軟な捉え方に見るべき点は多い。

II 「診断」とサイエンス

心理テストは多かれ少なかれ「診断」の役割を含んでいる。もちろん心理テストは、精神医学の診断のように、疾患を分類したり、ある特定の疾患の存否を決定したりすることを主目的とするものではない。しかし、心理テストの目的の中に病理の発見（例えば、認知症や自閉症などのスクリーニング）や適応水準の見立てが含まれることを思えば、両者が非常に近い関係にあるのは明らかである。

診断について中村（1992）は次のように言う。「ヒポクラテスと同時代にあって彼と対立したクニドス派の医者たちは、この診断に力を注いだのであり、彼らは、なによりも病気の詳細な分類をおこなったことで知られている。したがって、近代医学あるいは近代病理学の観点からすれば、より科学的であったのは、クニドス派流の医学であ

り、また客観的な原因を追究する前述の自然哲学者たちの疾病感であろう」（pp. 145-146）。また、医師としてアートの重要性を説く富永（2009）も、「診断を可能ならしめる病理学に関しては、「徹頭徹尾サイエンスのみでありアートの入り込む余地はない」という。つまり、診断に際しては経験主義に徹し、客観性を重んじるのが肝要ということである。

さて、心理テストに関しても、それに何らかの「診断」的な役割を担わせるためには、サイエンスのアプローチが不可欠となろう。なぜならば、病気のスクリーニングや適応水準などの判断は、個々人の印象に基づいて行うものではなく、経験的に得られた一定の標準に照らして、客観的に行うべきものと考えられるからである。心理テストを用いてこのことを実現するには、まずはターゲットとすべき事象（例えば特定の「病理」や「適応水準」などの構成概念）を操作的に定義し、それを確実かつ安定的に反映しうる指標を設計しなければならない。ついで数多くのデータを組織的に収集し、これを判断の拠り所（すなわち、標準）として位置づける必要がある。さらに、扱うデータに普遍性を持たせるために、それらを定量的に記述することも大切である。こういった一連の手続きを踏むことにより、経験的で客観的な見立てへとつながる。

いま述べたことは、実は一般的な心理テストが踏むべき科学的な手続きをただ羅列したに過ぎない。しかし、診断的な意味合いでそれを用いる以上、心理テストとしての科学的な成立要件を満たしていなければならないのは当然のことである。もちろん投映法も例外ではない。この点について言えば、ロールシャッハ・テストの科学性にまつわる数々の批判（Wood, Nezworski, Liliénfeld &

Garb, 2003) を真摯に受け止め、それに応えるかたちで開発された「ロールシャッハ・パフォーマンス・アセスメント・システム (Meyer, Vigliano, Mihura, Erard, & Erdberg, 2011, 以下, R-PAS)」は、現時点でサイエンスの方法論にもっとも忠実なロールシャッハ・システムである。ここで、R-PASと呼ばれる投映法の一技法が科学的である所以について、システム構築の趣旨や過程も踏まえ、簡単に触れておきたい。

R-PASは、第一にロールシャッハ・テストの妥当性を重視した。すなわち、テストの各変数や指標が「抑うつ」や「ストレス耐性」といった構成概念を本当に測定しているのか、という根本的な問いを徹底的に検証することを試みたのである。そこでMeyerやMihuraを中心とする開発チームは、システムの開発に先立ち、ロールシャッハ変数・指標の基準関連妥当性を問題とした夥しい数の文献を対象にメタ分析を実施した (Mihura, Meyer, Dumitrascu & Bombel, 2012)。膨大な量の文献 (2,467 編) を精査し有効なものだけを抽出する作業、各文献に示された数量的なデータを統一的に分析にかけるようにするための統計的処理は、いずれも多大な労力が求められ、それだけで約7年もの歳月を要したという (Scarls, 2017)。このようにして得られた分析結果に忠実に従い、開発チームは真に妥当性の検証された変数・指標のみをシステムの中に組み入れた (Meyer, & Eblin, 2012)。ついでMeyerらは、第二の問題、すなわち反応数の多寡が各種指標得点に影響を及ぼすという従来のロールシャッハ体系が有する構造的弱点の克服に取り組んだ。この弱点を乗り越えるために、Meyerらはテストの実施にあたって被検査者の反応数をコントロールするという何とも大胆な方法を R-PAS に取り入れた。

このことにより反応数もたらす情報は犠牲にされたが、その代わり、各種指標得点が安定し、信頼性が上がるという大きな強みを得た。さらに、第三の問題である標準化について、開発チームは世界各国 15 か所より非患者のデータを募り、そこから偏りなく抽出された 1,396 個の標本をノルムとした。これによって、各個人の相対的な位置づけがごく客観的に、高い精度でなされるようになった。このような取り組みが功を奏し、R-PAS においては測定の妥当性と信頼性が格段に向上した。つまり、投映法における診断的側面がより強化されることになったのである。

繰り返しになるが、医学的診断と心理アセスメントは同義ではない。しかし、見立てに際しては、いずれも科学的な態度を貫くことが大切である。対象者を冷徹な態度で見立てるからこそ、より適切な援助方法の選択が可能になるからである。それゆえに、R-PAS の取り組みに代表される、心理テストのサイエンス面の強化にはきわめて重要な意味がある。

Ⅲ 心理アセスメントにおけるサイエンスの限界

前節では、見立てに際してのサイエンスの重要性を述べた。しかし、ここで問題が生じる。そもそもサイエンスは、現象のあり様をできるだけ単一の要素で説明することを志向する (戸田山, 2011)。その際には、実在する複雑性は捨象され、単純な一般法則のみが抽象される (中村, 1992)。したがって、まず考えねばならないのが、人間という複雑で深遠な対象をこのように単純な一般法則によって説明することが果たして可能なのか、という問いである。

ここでは特に定量化と一般法則に伴う問題を取り上げる。例えば、ウェクスラー知能検査で示さ

れる得点は、厳密な科学的手続きに従って得られた偏差IQである。それゆえに普遍性をもつ。厳然と一般法則に従うならば、同じIQ得点は誰にとっても同じ意味を持つはずである。ところが、実際には、いかなる知能検査・学力検査においても、ときに理論から逸脱した反応パターンを示す人々がいることが指摘されている（光永, 2017, p. 135）。一例をあげると、前半のやさしい問題にかなりの率で失敗しながらも、後半の難易度の高い問題になると正答が続出するようなパターンである。仮に、このような特徴を示す人がIQ100という結果を与えたとしたら、この事例に一般法則（「記述分類=平均」）を適用することはできるであろうか。

サイエンスにあっては、上の例のように一般的な傾向に適合しない例は捨象される。特に量的なデータに基づいて法則が導かれる際には、それらは外れ値と見なされることもある。つまり、サイエンスを強く志向すると、あらゆる現象を単一の法則で説明しようとするあまり、そこから外れた事例の意味が顧みられなくなるのである。しかし、少なくとも心理アセスメントの仕事の中では、一般的な傾向から外れた事例を無視するわけにはいかない。むしろ、一般的な傾向から外れた事例にこそ光を当て、その個別的な意味を探っていくかねばならない。無論、この種の事例に対して「逸脱例」や「外れ値」などのレッテルを貼るだけでは何の意味もない。どのような場面で逸脱しやすいのか、あるいは、いかなる理由で逸脱が生じているのかを検討しない限り、本来の意味でのアセスメントを行ったことにはならない。

サイエンスが強く求める「普遍性」や「法則性」は、複雑な背景を抱えた人間を対象とする研究や実践とは相いれないところがある。例えば、

Asch (1956) の行った有名な同調実験では、多数派の意見にまったく影響を受けない実験参加者が25%ほど存在した。しかし、この実験では、実験者の意図に反して「人は多数派の意見に影響を受けやすい」という言説がひとり歩きした（小坂井, 2013）。つまり、25%の人々は一般法則に適合しない例として軽視（あるいは無視）されたという訳である。このようにマイノリティに属するデータを捨象するという意味で、サイエンスには限界があると言わざるを得ない。なぜならば、上にも述べた通り、心理アセスメントの仕事とは、あらゆる対象者の中にみられる個別性や特異性を適切に理解することに、その真骨頂があるからである。こういった理由から、心理テストを適正に遂行するためには、サイエンスとは異なるアプローチがどうしても必要となってくる。それが次節以降に述べる「アート」である。

IV アセスメント業務のプロセスとそれぞれの段階に占めるアートの比重

「アート」の概念が、心理テストのあり方を論じた従来の文献の中で、「個性記述的」「現象学的」「質的」アプローチといった言葉によって象徴されてきたのは、すでに述べたとおりである。それらの言葉は、確かにアートの一面を捉えてはいる。しかし、この概念の意味を明確に限定しているわけではない。それゆえ、改めてアートの概念を定義しておく必要がある。

辞書的に定義するならば、アートは「特定の事柄を遂行する技術、多くの場合は実践によって獲得されたもの」（Oxford Dictionary of English）となる。つまり、それは、一義的には実践を通して身につけた技術や技芸を意味している。しかし、医学や看護など臨床に関わる領域で、この言

業が「サイエンス」と対比的に扱われてきたことに注目するならば、この説明だけでは物足りない。もう少し言葉を補った方がよいであろう。そこで、近代的な〈科学の知〉に対立させるかたちで〈臨床の知〉の重要性を提唱した中村を参照すると、〈臨床の知〉は、「個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする」ものと説明される（中村、1992、p. 135）。この一文は、サイエンスの志向するものとは対極をなす、対象の固有性や質性に光が当てられ、その内的な意味を深く捉えるという意味において、アートの概念を言い当てている。これらを踏まえると、アートとは「実践を通して獲得された、対象の持つ個別的で深層的な意味をそれぞれの状況に応じて的確に理解する技術」といった言葉で説明するのが穏当なところであろう。

さて、このように定義されるアートは、心理アセスメント業務の中で、サイエンスだけでは対応できない問題をどのようにカバーするのか。このことを考えるにあたっては、心理アセスメントという業務全体をただ漠然と思い浮かべているは実りある議論はできない。アセスメントに含まれる仕事の内容は多岐にわたり、これを一括りにすると議論の焦点がぼやけるからである。

そこで本稿は、アセスメントを以下のような段階に分け、それぞれの段階におけるアートとサイエンスの役割と比重を検討してみる。

- (1) データを分析（スコアリング・コーディング）する段階
- (2) データを解釈する段階
- (3) 得られた結果を、その情報を必要とする人

に伝達（フィードバック）する段階

- (4) アセスメント結果を治療的に活用する段階

IV—(1) テスト・データを分析する段階

この段階の主たる仕事は、テスト反応の適切な分類・整理である。具体的に言うならば、MMPIに代表される質問紙の各尺度得点を算出すること、知能検査を正しく採点し標準得点に置き換えること、投映法であるロールシャッハ反応を分類したり（スコアリング・コーディング）、描画を各種評定ポイントに従って点数化したりすることを指す。一目して分かる通り、これらの作業はテスト・マニュアルに即して淡々と実施されるものであり、そこに主観の入り込む余地などない。よく、「投映法のスコアリング（コーディング）は技術を要する」といったような言葉を耳にするが、ここでいう「技術」は「アート」と同義であろうか。答えは否というべきであろう。

スコアリングは、科学的な手続きとしての心理テストの一部である。その証拠に、スコアリングにおける評定者間一致率や級内相関係数などは、心理テストの成立要件である信頼性概念の中に含まれている。もちろん、反応のどこに注目してスコアリングを進めるか、いかに効率的に進めるか、といった点に関しては多少の経験は必要とする。しかしながら、スコアリングは個々の査定者が任意の判断で行うものではない。その作業は、常にマニュアル通りに客観的になされねばならない。

したがって、この段階においてはサイエンスの比重が圧倒的に大きく、アートの役割はほとんどない、といってよい。富永（2009）が、診断のベースとなる病理学を「徹頭徹尾サイエンスのみでありアートの入り込む余地はない」と評したのと

同じことである。

IV—(2) データを解釈する段階

分析の次には、得られたデータから対象者を理解する段階に移行する。あらゆる心理テストに当てはまることであるが、この段階においては、得られた結果（サイエンスによって導かれた数量的なデータ）を、単に羅列するだけでは意味がない。その値の意味するところを考え、各指標得点を有機的に統合し、対象者像を描き出す必要がある。これが解釈と呼ばれる作業である。

解釈は、アートのみによってなされる仕事であるかのように考えられている向きもある。しかし結論を先に言えば、それは誤解である。確かに「解釈」の原義は、「物事、特に表現されたものを、自分の経験や判断力などによって理解すること」（精選版日本国語大辞典）であるが、これはあくまでも、ほとんど制約のない中で表現された芸術作品や他人の行動についての「解釈」である。心理テストが対象とするのは、それらとは異なり、一定の条件のもとで実施された課題や作業、質問に対する反応である。したがって、その解釈の方略には、体系的に蓄積された指針が存在する。投映法といえども同様である。

例えば、ロールシャッハ・テストの一体系である包括システムでは、各変数、各指標の得点を闇雲に組み合わせて、対象者像を描き出すわけではなく、ステップ解釈とよばれる一定の指針にのって、システムティックに解釈を進めていくことが推奨される（Exner, 2003）。その指針は、従来の研究が体系的に蓄積してきた知識（各指標の期待値や一般的に観察される比率等）に基づいて構成されている（高橋, 2009）。つまり、投映法であっても、解釈という作業の中でのサイエンス

の担う役割は決して小さくはない。

では、解釈におけるアートとは何か。さらにアートとサイエンスの役割はどのような関係にあるのか。ここで、投映法の性質に関するたとえ話としてよく引き合いに出されるレントゲン写真（Frank, 1939；鈴木, 1997；高瀬, 2016）を取り上げて考えてみたい。物理化学者であり、哲学者でもある M. ボラニーは〈知ること〉のアートを象徴する、非常に印象深いエピソードを紹介している。それは、まさにレントゲン写真の読影にまつわる次のような体験談である。駆け出しの医師がレントゲン写真を見ても、最初はそこに何が映っているのか皆目わからない。エキスパートの話も聞いても、まったく何も見えてこない。しかし、2、3週間、その話を聴き続け、異なったケースの写真を次々に注意深く眺め続けていくと、医師の中に「ある試行的な理解が萌芽し始める」。さらに忍耐し続けると、やがて医師には「生理学的変異と病理学的変化が、瘢痕が、慢性病が、急性疾患の徴候が」はっきりと見えるようになる（ボラニー著、長尾訳, 1985, p. 93）。

このエピソードが示しているのは、個々の患者に特有なデータであるとともに、一瞥しただけではその意味がつかみにくいレントゲン写真の解釈は、数多くのデータに触れることによって初めて適切になされる、ということである。実践を通じて、個々の深層を捉える技術を獲得するという点で、それはまさしくアートの一側面を言い当てよう。ところが視点を変えてみると、ここからはまったく別の意味も見えてくる。上のエピソードでは、医師はある日突然に天啓を得たかのようにレントゲン写真を読めるようになったのではない。「試行的な理解」という言葉に示されているように、実践を続ける中で医師なりの一定の読影

ルールができていったはずである。このルールがどのようなものであったかは推測するほかないが、エピソードを読む限りでは、数多くのレントゲン写真を見、説明を受けたことにより、医師の中で、ある特定のポイントに従って、それらを分類したり、比較したり、あるいは照合したりといった体系的な視点が育まれていったのではないかと考えられる。仮に、記憶の中に蓄積された大量のデータと目の前の写真との比較が体系的になされ、適切な分類に至ったのだとするならば、それは実にサイエンティフィックな方法であると言えまいか。

つまり、このエピソードから導き出されるのは、レントゲン写真のように、個別的で、意味のつかみにくい質的なデータの解釈は、(1) 数多くの実践によって獲得された技術（アート）によって初めての確になされるということであり、その技術は(2) 経験的に蓄積された数多くのデータとの比較・分類・照合といったサイエンティフィックな方法に裏打ちされている、ということである。特に(2)について補足しておく、この種の比較や分類が、一人の医師の中だけで行われるとするならば、それはボラニーの言う〈暗黙知〉、すなわち〈知ること〉のアートということになるが、比較・分類の方法が明確化され、定量化することが可能になれば、完全なサイエンスに転化しうるのである。事実、昨今ではCTの画像データを一定のルールに従って分類・比較・照合し、確率論的に近似するデータを検索するデータベースが開発され、画像診断に応用されていることは、高瀬(2016)が紹介している通りである。このように考えてくると、個別的・質的なデータの解釈において、アートとサイエンスは決して対立するアプローチではなく、実は表裏一体と

なって機能していることが見えてくる。すなわち、心理テストの解釈とは、サイエンスを基礎にしたアートによってなされているという見方である。

ところで、ここで心理テストの解釈を「個性記述的」なものと位置づけることの功罪についても考えておかねばならない。投映法のように反応の自由度が高い課題においてこの言葉が用いられるときは、必ずといってよいほど、反応は唯一無二であるため、定量的な分析に堪えないという主張に結びつきやすい(例えば、Kramer, 1991a; Aronow & Moreland, 1995など)。極論のようでもあるが、こうした議論は投映法の領域にはいまだに根強く残っているのである。

なぜ、このような主張がいまだになされるのか。ここには2つの理由が考えられる。第一に、投映法においては個々の反応内容(物語と言い換えてもよい)こそ対象者を読み解く鍵であると見なす考え方があること、第二に「個性記述的(idiographic)」の原義にあまりにも忠実であること、の2点である。第一の理由について言葉を補うならば、物語はそれ自体が個々の対象者にとって意味のあるものであり、要素ごとに分解して得点化したり、ましてそれを他と比較するのはナンセンスであるということになる。第二の理由は、個性記述的という概念を提唱したヴィンデルバント(1940)が、心理学や歴史学をはじめとする「精神科学」は、一回性、個別性、特殊性を重んじるべきであり、法則定立を目的とした自然科学とはあくまでも対立すると主張したことによる背景がある。

確かに投映法の反応は、二つとしてまったく同じものは存在しない。それゆえに、それぞれに尊重されるべき個性があることは論をまたない。そ

れでもなお、上のような主張はやはり極論であると言わざるを得ない。そもそも「個性」とは、その個に備わる「他から区別させている」性質を意味する (Oxford Dictionary of English)。この定義に従えば、他との比較を行わない限り、個性の記述ができないのは明白である。つまり、ある反応内容が、その対象者にとって特別な物語なのか、それとも解釈する必要のない「ありきたりな物語 (cliché) (Rapaport, 1946) なのかは、一定の方略に従った分析と一般的な傾向との比較を行わない限り、明らかにはならないのである。

また、ヴィンデルバントが心理学における個別性や特殊性は、一般的な法則に還元されて理解されるという考えを示したことに留意すべきである (高瀬, 2016)。それは、ある特性や出来事が個性的であるとか、特殊であるとか、といったことを言うためには、一般的な法則を押さえていなければならないということの意味している。これらのことは、いずれも心理テストの反応の解釈においては、一般的な傾向 (ノルム) や法則の把握といった、サイエンティフィックな方法論が不可欠であることを示唆している。

以上を踏まえ、解釈の段階におけるサイエンスとアートの比重についてまとめておく。個々の心理テストの結果は他の多数に照らすことにより明確になる。それを押さえるからこそ、深い理解へと導かれる。したがって筆者は、解釈におけるサイエンスとアートの比重はちょうど半々であると考えている。すなわち、サイエンスに基づいたアートという基本方略である。例えば、対象者の与えた反応は一般的な反応傾向に合致しているか、それとも外れているか、もし外れているとするならば、それはどの点についてであり、またどの程度であるか、といった基本情報に関しては、主にサ

イエンスの方法に依拠して、まずはしっかりとパーソナリティ像の土台を作る。そのうえで、もし対象者が一般的な傾向から外れたパターンを示したとするならば、それはどのような質をもったものか、なにゆえ逸脱したか、指標の得点間で矛盾が生じたとするならばそれは何に由来するか、指標間の得点の差異をいかに有機的な統合させるか、あるいは対象者に特有の反応内容に含まれる意味とは何か、といったように定量化や法則の適用が困難な面は、それぞれの状況に応じてその意味を深く捉えていくアートに受け持たせるのである。無論、この種のアートは、テストデータに関する科学的な知識をベースにし、日々の実践の積み重ねにより習得されるものである。このようにサイエンスによる骨格の形成と、アートによる肉付けといった形で、双方のアプローチを相補的に用いるならば、アセスメントの仕事はより有効なものとなろう。

IV— (3) 結果を伝達 (フィードバック) する段階

心理テストの結果から得られた情報の伝達は大きく分けて次の二種類がある。第一がテストの依頼者に対するもの (報告書作成を含む) であり、第二がテストの対象者自身に対するものである。第一の伝達に関しては、前節の「解釈」でふれたことと重複する面もあるので、ここでは主に第二の伝達 (この種の伝達を「フィードバック」と呼ぶことが多い) に焦点をあてる。

さて、フィードバックについては、かねてからその重要性が指摘され、最近になって研究論文数もふえてきてはいるものの、まだその歴史は浅く、十分な知見が蓄積されているわけではない。さまざまな研究者がそれぞれの実践例を示した

り、方針を提唱しているというのが現状である。そこで、ここでは、主に津川（2015）の提唱するフィードバックのコツと留意点を取り上げる。

津川はフィードバックのコツとして、次の5点をあげる。(1) あれもこれも山のようにフィードバックしないこと、(2) 対象者の状態に合わせて、相手が内的に受け取れる内容を、順番を考えて、理解できる表現で説明すること、(3) 協働作業であること、(4) 健康な側面も伝えること、(5) 心理支援の一環であること意識して返すこと、である。

この中で特に重要と考えられるのは、(2)と(3)である。まず、(2)は相手の様子をしっかりと見て相手が受けとれる内容を順番に、しかも平易な日常用語で説明すること、(3)は、「一方的にフィードバックするのではなく、相手の理解を確かめたり、相手のコメントや反論を聞きながら、話し合う形で行う」こととされる。

この説明を読めば明らかなように、フィードバックは普遍化や定量化とは、ほとんど縁のない技術である。手続きとしては、津川の言う「コツ」のように、さまざまな事例研究や臨床経験などから導かれた一定の指針があるが、この段階でものをいうのは、フィードバックの場に臨み、状況を的確に判断し、対象者のニーズを察知するといった、まさに査定者の持つアートの力であることを強調しておく。

IV—(4) 治療的に活用する段階

最後に、心理テストを「治療的に活用する」段階を取り上げたい。これは、心理テスト結果に基づいて援助方法を模索することではなく、心理テストそのものを援助の一環として積極的に活用することを意味する。

アセスメントの治療的な活用という考え方については、わが国でも、Finn（2007）（訳書は2014年刊行）の著書を通して、広く知られるようになった。しかし、実はFinnの著書がわが国で紹介される20年以上も前に、山本（1992）がTATを題材とした治療的な面接論（「かわり分析」）をすでに展開しているのである。投映法を用い、査定者と対象者の二人が、対象者の中に生まれる物語を共に見つけていくことを強調した点で、山本とFinnの考え方は驚くほどよく似ている。本稿では、山本の論考ならびにその実践例に注目し、サイエンスとアートの問題を論じることとする。

現象学に深い影響を受けた山本は、対象を理解する方法には、診断的理解と治療的理解の2つのアプローチがあることを提唱した。1つ目の診断的理解は、客観的な妥当性に裏づけられたアプローチであり、サイエンスとしての方向性をもったものである。それに対して治療的理解は、彼がより重きを置くものであり、「現象学的方法をとる視点が、見られる者の側に置かれ、見る者は見られる者にあらわれてくるものを、見られる者と共にみつけようとする立場をとる」（p. 19）と定義される。すなわち、査定者（＝見る者）は、「共感的態度」をもって、対象者（＝見られる者）のうちに生じる物語を共に見つけ、それを共に味わうという意味である。山本は、この治療的理解もたらす効果として、(1) 対象者と査定者が同じ物語を「共に見る」ことによって、一体感のある人間的接触が生まれること、(2) 査定者が対象者の体験を繰り返し明確化することにより、対象者の中に新たな気づきが生まれること、などを複数の事例を通して示した。

以下は、実際のやり取りの一部を抜粋したもの

である。

C：常に母なんか私に自分でやっていきなさいって…

T：家の中にいても1人、1人ぼっちの感じがあるんですか基本的に…

C：そう、そうですね昔から…1人ぼっちで何かやっている。

T：なんか、そうね、それが図版19の鳥がさびしそうにしているとか（ああ）。もの悲しいしすごく淋しい雰囲気に出ている。それに図版16なんか、ものすごくのんびりした感じなんだけど地平線の見える野原で、春だし夕暮れなんだけど、木も花もないとかね。…ほっとしている。…これまさに1人の世界だよ。… (p. 206)

この短いやり取りには、相手の体験する内的な世界を明確化しながらも、そこに寄り添い、その世界を共に見ていこうとする査定者の姿勢が如実に示されている。しかも、前節で取り上げた情報の伝達を主たる目的としたフィードバックよりも、こちらの方がより直観的により深いレベルで対象者を捉えている。その理解は他と比較することによって得られたものではなく、無二の存在としての個が徹底的に尊重されていることに注目しなければならない。このような深いやり取りは、査定者の側にテストに関する知識と技術が確実に備わっているだけでなく、何度も経験を重ねることによってようやく可能になると言えよう。つまり、アセスメント業務におけるこのようなやり取りこそが、「実践を通して獲得された、対象の持つ個別的で深層的な意味をそれぞれの状況に応じた的確に理解する技術」(本稿)としてのアート

なのである。

以上からも明らかのように、一連のアセスメント業務の中での最終段階ともいえる、心理テストの治療的な活用だけを切り取って見ると、アートの比重が圧倒的に高い。もちろん、このアートが本当の意味で奏功するためには、それまでの段階でテスト結果の分析や解釈が適正になされていること(すなわち、サイエンス)が前提であることは山本(1992)も強調するところである。

V まとめ

本稿は、心理テストを用いたアセスメントにおいて、サイエンスとアートの双方がどのように位置づけられ、どのような役割を担うのかを、さまざまな文献をひもときながら検討した。

サイエンスとアートは、アセスメント業務にとっていずれも必要不可欠な要素である。しかしながら両者には、その性質上、担うべき役割に大きな差異がある。そこで、アセスメントの業務を(1)分析、(2)解釈、(3)伝達、(4)治療的活用、という具合に段階的に分けたところ、サイエンスの受け持つ役割は(1)がもっとも大きく、(2)(3)(4)と移行するにつれて小さくなること、逆にアートの受け持つ役割は(4)を最大として、(3)(2)(1)の順に小さくなることが理解された。サイエンスとアートの互いの強みを尊重し、また互いの不得意とするところをカバーするといったかたちで、その機能を相補的に活用してゆけば、より有効なアセスメントへとつながるであろう。

〈付記〉本論文は、2018年日本心理臨床学会第37回大会・会員企画シンポジウム「心理アセスメントにおけるサイエンスとアート」・ロールシャッ

ハ法を中心に」にて発表した内容に加筆修正を行ったものである。

文献

Acklin, M. W. (1995). Integrative Rorschach interpretation. *Journal of Personality Assessment*, 64, 235–238.

Asch, S. E. (1956). Studies of independence and conformity: A minority of one against a unanimous majority. *Psychological Monographs: General and Applied*, 70 (9), 1–70.

Aronow, E., & Moreland, K. L. (1995). The Rorschach: Projective technique or psychometric test? *Journal of Personality Assessment*, 64, 213–228.

Exner, J. E. (1991). Comments on “the Rorschach M response: a return to its roots”. *Journal of Personality Assessment*, 57, 37–41.

Exner, J. E., Jr. (2003). *The Rorschach; A comprehensive system: Vol. 1. Basic foundation and principles of interpretation* (4th ed.). New York: Wiley.

Finn, E. S. (2007). *In our clients' shoes: Theory and techniques of therapeutic assessment*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers. [野田昌道・中村紀子訳 2014 治療的アセスメントの理論と実践 金剛出版.]

Frank, L. K. (1939). Projective methods for the study of personality. *The Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied*, 8, 389–413.

小坂井敏晶 (2013). 社会心理学講義：〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉. 筑摩書房.

Kramer, R. L. (1991a). The Rorschach M response: A return to its roots. *Journal of Per-*

sonality Assessment, 57, 30–36.

Kramer, R. L. (1991b). Response to Exner's comments on “The Rorschach M response: A return to its roots”. *Journal of Personality Assessment*, 57, 42–45.

Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System: Administration, coding, interpretation, and technical manual*. Toledo: Rorschach Performance Assessment System.

Meyer, G. J., & Eblin, J. J. (2012). An overview of the Rorschach Performance Assessment System (R-PAS). *Psychological Injury and Law*, 5, 107–121.

Mihura, J. L., Meyer, G. J., Dumitrascu, N., & Bombel, G. (2012). The Validity of Individual Rorschach Variables: Systematic Reviews and Meta-Analyses of the Comprehensive System. *Psychological Bulletin*. Advance online publication. doi: 10.1037/a0029406.

光永悠彦 (2017). テストは何を測るのか：項目反応理論の考え方. ナカニシヤ出版.

Moreland, K. L., Reznikoff, M., & Aronow, E. (1995). Integrating Rorschach interpretation by carefully placing more of your eggs in the content basket. *Journal of Personality Assessment*, 64, 239–242.

中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か. 岩波新書.

Peebles-Kleiger, M.J. (2002). Elaboration of some sequence analysis strategies: Examples and guidelines for level of confidence. *Journal of Personality Assessment*, 79, 19–38.

- マイケル・ポラニー著，長尾史郎訳（1985）．個人的知識：脱批判哲学をめざして．ハーベスト社．
- Rapaport, D. (1946). The Thematic Apperception Test. In D. Rapaport, *Diagnostic psychological testing*, Vol. 2. Year Book Medical Publishers: Chicago. pp. 395-459.
- Ritzler, B. (1995). Putting your eggs in the content analysis basket: A response to Aronow, Reznikoff, and Moreland. *Journal of Personality Assessment*, 64, 229-234.
- Searls, D. (2017). *The inkblots: Hermann Rorschach, his iconic test, and the power of seeing*. New York: Crown/Random House.
- 鈴木陸夫 (1997). TATの世界：物語分析の実際．誠信書房．
- 高橋依子 (2009)．ロールシャッハ・テストによるパーソナリティの理解．金剛出版．
- 高瀬由嗣 (2016)．心理テストにおける量的アプローチと質的アプローチの関係．明治大学心理社会学研究, 11, 159-170.
- Te'eni, D. R. (1998). Nomothetics and idiograph-ics as antonyms: Two mutually exclusive purposes for using the Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, 70, 232-247.
- 戸田山和久 (2011)．「科学的思考」のレッスン：学校で教えてくれないサイエンス．NHK 出版．
- 富永真琴 (2009)．臨床医学におけるサイエンスとアート．山形医学, 27 (1), 1-10.
- 津川律子 (2015)．検査結果のフィードバックに関する考え方．高橋依子・津川律子編著．臨床心理検査バッテリーの実際．遠見書房．第13章, 199-209.
- ヴァインデルバント著，篠田英雄訳 (1940)．歴史と自然科学・道徳の原理に就て・聖：「プレルデーエン」より．岩波文庫．
- Wood, J. M., Nezworski, M. T., Lilienfeld, S. O. & Garb, H. N. (2003). *What's wrong with the Rorschach: Science confronts the controversial inkblot test*. Jossey-Bass: San Francisco.
- 山本和郎 (1992)．心理検査TATかかわり分析：ゆたかな人間理解の方法．東京大学出版会．

Science and Art in Assessment Using Psychological Test

Yuji TAKASE

ABSTRACT

This paper focused on the processes of psychological assessment using the tests and examined the role between science and art at each stage. Since psychological tests play a diagnostic role, it must be based on scientific methods. However, science alone cannot do its job when describing the complex personality that could not be explained by a simple law, informing the results to the test takers, and applying their test results to psychological services. In the position a role of art becomes more important. When classifying the process of assessment into several phases (analysis, interpretation, information, therapeutic usage), the ratio of scientific and artistic role differs in each aspect. From this point of view, we discussed ways to complementally integrate both roles in order to carry out the psychological assessment effectively.

Keywords: Psychological assessment, Science, Art